

地域研究概論とアフリカ研究——●犬飼一郎

(国際大学大学院国際関係学研究科教授)

今度新たに私は東洋学園大学の英米地域研究学科3年生を対象として地域研究概論を講義することになった。この大学では地域研究論としてヨーロッパ、カナダ、オーストラリア、アジア、中国、日本をそれぞれとりあげている。しかし概論は地域研究の方法論が中心とならざるをえない。そこで社会科学系のディシプリンを持たない学生に如何にして地域研究、特にアフリカに関する興味を持たせるかについて苦慮した結果、以下の方法をとってみた。

まず授業の始めにアフリカの民族音楽を5分ほど聴かせ、ついでその他の地域、たとえばインドネシアのガムラン、スコットランドのバグパイプ、インドのシタールなどの音楽を5分ほど聴かせる。もっとアフリカの音楽を聴きたいという要望が強まった。

川端康成の『雪国』の冒頭と鈴木牧之の『北越雪譜』の一部を読んで聴かせ、人々の暮らし方が如何に環境によって影響を受けているかを考えさせてからアフリカの様々な環境帯で如何にして人々が適応した暮らしを営んでいるかを説明する。

両親、父方の祖父母の出身県を指摘させて、狭い日本国内での人口移動の動態と原因を考えさせ、現在のアフリカで起こっている人口移動の説明に移る。

加賀友禅、美濃和紙、益子焼きなどの伝統的地場産業の歴史を考えさせて、アフリカでこのような地場産業が育たなかった理由として、地域経済が発展する前に国際経済に組み込まれてしまった植民地化の影響を解説する。

身近な問題から地域研究に関する興味を引き出す方法が成功して、学生たちからアフリカについてもっと知りたいという積極的要望が生まれてきた。心強い励ましである。